

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成20年度派遣報告書

——エジプト、アル=ディーワーン ガーデン・シティー校、アラビア語、H21. 1. 20-H21. 4. 12——

平成20年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程2回生

今井 静

#### 自身の研究テーマについて

報告者は、現代ヨルダンとパレスチナ問題との関わりについて、①ヨルダン・パレスチナ間の一体性の存続、②ヨルダンおよびヨルダン川西岸地区に居住するパレスチナ人に対する、ヨルダン政府による法的地位の付与、③パレスチナの伝統文化の一つであるパレスチナ刺繍のヨルダンにおける継承、という三つの観点から研究を進めている。

1991年のマドリード中東和平国際会議の開催と、1993年のオスロ合意の締結によって、西岸・ガザ地区を領土とするパレスチナ国家の建設による二国家解決こそが、紛争解決のための最も有効な手段であるという合意が形成されてきた。そして、それにもなつて、パレスチナ問題の重要なアクターであったヨルダンの位置づけは周縁化されてきた。ヨルダン国内においても、ヨルダン川西岸地区の領有を正式に放棄した1988年以降、パレスチナをヨルダンから切り離すためのさまざまな方策が採られている。しかし、国境線による両者の分断が自明のこととされているなかで、ヨルダンおよびヨルダン川西岸地区の住民の国境を超えた生活圏は現在まで維持されてきている。このような現状を踏まえて、あるべき国家の枠組みを所与のものとして実態に即した分析を行い、現代ヨルダンおよびパレスチナをめぐる紛争の新たな理解に寄与することが、報告者の研究目的となっている。

#### 研修言語の概要

アラビア語は、主に文章で用いられる正則アラビア語（フスハー）と、口語（アーンミーヤ）の二つからなる。フスハーが会話に用いられる場合にはアラビア語話者の共通語となるのに対して、アーンミーヤは地域差が大きく、それぞれ固有の語彙や発音を含むことが特徴となっている。たとえば、フスハーではj□mと発音されるجの音が、報告者の研修地であったエジプトのアーンミーヤではg□mと発音されていることなどは、その一例である。

#### 語学研修の内容について

報告者は今回の語学研修で、文献資料の活用に必要な読解力と、フィールド調査に必要な会話力の二つの向上を目標としていた。研修開始時点での報告者の語学力より、語学学校ではまず初級文法の定着とフスハーによる会話の練習が重視された。文法のテキストは既存の初学者用のもので、テキストの内容に沿って作られたディーワーン校オリジナルのワークブックが併用された。また、知識の定着のために作文の課題が出されることもあり、担当講師から添削指導を受けた。報告者の担当講師はアラビア語しか使用せず、授業の最初と最後の雑談や授業中の質問等を通じて、アラビア語で発信する練習を重ね

ることができた。その後、初級文法が終了後すると、会話文を中心としたディーワーン校編集のテキストを用いて、中級者用の授業を受けた。授業中の会話を通じて、講師には徐々に報告者の研究関心について理解を深めてもらい、アラビア語で書かれた論考や新聞記事、文献の購読によって、専門的な語彙についても指導を受けた。その他、映画や音楽の視聴を通じて、現代アラブ文化に対する知見を得た。

以上が報告者の受けた研修の内容である。ディーワーン校は学習者の能力に応じてあらかじめレベル別のカリキュラムを設定しているが、学生の要望に応じて授業内容のアレンジが可能である。授業は週に5日あり、授業時間は一日に2時間半、または5時間の選択制となっている。

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

報告者がエジプトを訪れたのは、前年末からのイスラエルによるガザ攻撃が終了してから、1週間もたない時期であった。カイロ市内各地の街角や地下鉄の車内には、ガザへの寄付や連帯をよびかけるポスターが貼られており、報告者の研究関心を知った人から、イスラエルの軍事侵攻についての意見を求められることもしばしばであった。なかには、日本における報道や日本政府の対応に関心を示す人もおり、パレスチナ問題がアラブ世界と外部をつなぐ共通の話題であることが感じられた。たとえば、語学学校の教師らも、日本人の中東認識を知るという意味で、報告者との意見の交換を有意義に感じているようであった。彼らとのやり取りや現地で入手した文献の購読を通して、エジプトにとってのパレスチナ問題は、自身がより密接に関係しているアラブ・イスラエル紛争というより大きな枠組みの一つの要素として捉えられているということに気づいた。

### 目標の達成度や反省点について

報告者がアラビア語の学習をはじめたのは大学院入学後のことであり、研修をはじめた時点では、初級文法の知識と、研究分野におけるごく僅かな語彙を得ているのみであった。そのため、研修当初は文章を読むのにも時間がかかり、簡単な会話もままならない状態であった。二ヵ月半の研修期間では、それ以前と比較してより多くのアラビア語の文章に触れ、文法的知識を定着させたことから、特に読解力について大きな改善が見られた。また、アラビア語学習に集中して取り組んだことから、研究対象に関する語彙を蓄積することもできた。一方で、日常生活で使用される語彙や経験の不足から、会話については読解力ほどの進展が見られなかったことが報告者の課題となった。報告者の努力不足以外には、語学学校の教師以外に報告者に対してフスハーで会話をしてくれる相手をほとんど見つけることができなかったことも、その一因であったと考えられる。



写真1：語学学校の入口



写真2：授業風景



写真3：ガザ支援ポスター